

〈日本図書館協会選定図書〉

「情報社会のネオスタンダード」

浅間正通 編著

本書は、2002年夏に刊行された人文・社会学系（書店分類によれば）の書である。といっても、副題である「多文化共生社会のコミュニケーション」からも窺えるように、その内容は、主に情報社会の中のコミュニケーションに照準を合わせている。

昨今のごとき、一般書・専門書のジャンルに関わらず書籍の新陳代謝が激しい出版界にあって、ややもすると風化傾向を帯びるのは文系書籍の宿命であるが、そのような熾烈な出版環境の中にありながら、細々と直接・間接に多様な分野から問い合わせがあるのは編者冥利につきる。あるときは「ネット自殺」に関するコメントを新聞社から求められたり、あるときは視聴覚教育関連の講演会やNIE（「教育に新聞を」）の勉強会に招かれたり、そして、あるときは図書館の多文化サービスアドバイザーとして協力を請われたり、といった具合に、いずれも本書が何らかのきっかけとなり得ているのは実に有難い話である。

しかし、最も興味深いのは、本書が予想に反して意外と理系の人々の間に愛読され、理系の教育・研究機関の図書館などに多く配架されている点である。この点に関しては、偏に、本書の執筆陣の一翼を担ってくれた静岡県立浜松工業高等学校教諭の森下博正氏の功績に負うところが大きい。なぜならば、本書にとって氏が担当した「メディアリテラシー」は、本書の理念を訴えるためには必須不

可欠の執筆項目であったからである。しかも、「情報社会の病理」を抉り出す必要性もあり、その視点に工学系の発想は欠かせず、と同時に、氏がカナダのメディアリテラシー教育の実際を見聞していたのも時宜に当たっていたと言える。つまり、本書に通底するコア・エッセンスとは「科学技術と人との共生」に他ならないのである。

科学技術の飽くなき進展によって達成されるその利便性を突き詰めて考えてみると、そこには絶えず「パーソナライズ」（個別化）という言葉が付きまとう。洗練された社会の構築を支援する科学技術の開発プロセスにおいて、社会と対立する概念を有する個別化が推進されるのは、ある意味で悲劇的なことである。なぜならば、感情伝送の場がことごとく失われようとする傾向にあるからである。すなわち、人間が相互の価値接触によるフィードバックを通して確立し合ってきた価値形成の場すら、見出せなくなりつつあるのである。昨今の電子コミュニケーション環境を例にとれば、思い当たる節も多かるう。そのような社会環境の予兆に、警鐘を鳴らしたくて編んだのが本書である。

振り返って、冒頭に「2002年夏に刊行された」と記したが、その執筆には1年半の歳月を要している。言わずとも知れた悪夢の「セプテンバー・イレブン」（2001/9/11）が、執筆陣の筆力に、さらなる「実感」を込めたのは言うまでもない。出版から些か時間は経過したが、あらためて多くの先生方の目に止まれば甚だ幸いである。

（創友社、232頁、2,100円）

（浅間正通 静岡大学情報学部教授）